

【プロローグ】海に浮かぶ性奴隷の国

ここは海に浮かぶ小さな島国。

この国はとある独裁者によって治められている。

碌な資源や産業がないこの国が独立国家として国連に加盟せず存在しているのはある業種において世界一の強みをもっていたからだ。

その産業とはエンタメ産業だ。

漫画やアニメ、アイドルは世界中に輸出され、多額の外貨を稼いでいる。

また性産業も盛んであり、多くの観光客が性的サービスを目当てに訪れる。

こちらも国の収入源を支える太い柱であり、エンタメ産業と性産業により国は世界でも有数の富裕国となっている。

そして政府はそのお金を使い、各国の要人や資本家と繋がりを作り、また軍事力の面でも最新兵器や大量破壊兵器を保有し、独立を守っている。

つまりこの国を批判したり武力侵攻を企てたりするだけで、逆に自分たち自身がとてつもない損失を出すような仕組みができていた。

この国の性産業で特徴的なのは、女性のような見た目をした男性がサービスを行う店が多くあり、そしてどの嬢も容姿やサービス技術が非常に高いレベルにあることだった。

これは、碌な産業がないこの国で就ける仕事は極端に少なく、また性産業の待遇がとても良いことから、毎年多くの男性が性産業を志願するので、激しい競争が起きるため、自然とレベルが高くなるからだった。

そして性産業につく嬢には大きく分類して3つのランクが存在する。

Aランク・・・最高位の嬢。生活の自由もあり、家族にも多額の恩給が支給されるだけでなく、引退後のアフターキャリアについても国が保証してくれる。政府要人や資本家の相手を主な仕事とするため、容姿に加えて高い教養を求められる。このランクの嬢は国の指示で相手が決まるため、観光客や一般人は会うことすらできない。また下位ランクの嬢を身の回りの世話のために配置される。Aランクはこの配置された下位ランクの嬢の育成も任されている。Aランクに上がれるのは全体でも数パーセントで、非常に狭き門となっている。

Bランク・・・もっとも多くの嬢が所属する階層。生活の自由度はそこまで高くはないが、休みの日は自由に過ごすことができ、給料面でも平均年収の倍近くを稼ぐことができる。家族にもある程度の支援があり、アフターキャリアも国が力になってくれる。しかし多数の嬢がいるだけに待遇は上下の幅が大きく、上位者はAランク嬢に配置され将来のAランク候補として高い待遇を受けるが、下位の嬢は収入もそこまでずば抜けて高くはなく、アフターキャリアについてもある程度自力でなんとかしないといけない。ただ、頑張り次第で上を目指す位置のため、全員が職務に励んでいる。主な相手は富裕な観光客や、政府関係者などであり、お金さえ払えばだれでも利用することができる。

Cランク・・・この階層の嬢は性奴隷という表現が正しい。何かしらの理由で強制的に女性化させられて、厳しい監視のもと性産業に就いている者たち。その多くが犯罪者であり、死刑か性奴隷かを選ばせられてこの身分になっている。犯罪と言っても国家の批判や非協力的な態度など、民主主義国家では罪にならないようなレベルの物が多い。

このランクの嬢は上位への昇格が絶望的で、よほどの事がない限り昇格はしない。また給料なども無く、休日も与えられない。所定の期間務めると刑期が大幅に減らされるだけだ。このランクは主に観光客や一般人を相手にするため、とにかく数をこなさなければいけな

い。途中で使えなくなれば強制的に収容所送りとなるため、彼女達は死に物狂いで職務についでいる。

細かく分類すれば更にランクの中でも上下があるが、基本的にはこのような支配システムとなっている。

そしてまもなく卒業の俺は家族を養うため女として国家所有の娼婦になることを決めた。

【第一章】男から女へ

学校を卒業した俺は「国民歓待員希望届け受理通知書」通称「雌奴隷契約書」をもって塀で囲まれた大きな建物の入口に立っている。

ここは俺のように雌奴隷になることを決めた者が最初に入る教育施設だ。

ここでは健康診断をして、問題がなければ体の雌化処置が行われ、続いて性奴隷としての教育を受ける。

教育中は名前をとりあげられ、個人は番号で識別される。

そして研修が終わると新しい名前が国から与えられるので、俺の名前は引退するまでずっと社会から抹消される。

「教育を受けに来た8番です」

俺はインターホンを鳴らすと、マイクに向かって要件を告げ、書類に書かれたバーコードをスキャンする。

「ごくろう、中に入って受付に進みなさい」

機械的な返答と同時に鉄製の扉が開く。

俺は意を決して中に入る。

教育中は衣食住を含めて全てが国の管理下に置かれる。

また一時的に国民台帳から存在が抹消され、国の資産・・・いや、備品として登録されるため、スマホや保険類は全て無効になる。

そのため持ち物も書類だけであり、着替えや私物類のもちこみはできない。

「この度は国民歓待員を志願していただき、ありがとうございます。この先で健康診断を受けてください。それと書類はお預かりして、これからはこの首輪で情報を管理しますの
で着けていってください」

ありがとう、と言いながら全く心の籠っていない受付の人に書類を渡し、首輪を受け取る。
俺は首輪を受け取ると自分の首につける。

健康診断は問題なく通過した。

首輪に付けられているタグを読み込み、医師の診察を受けたら終わりだ。

この健康診断合格が出された段階で俺は人間ではなくなる。

服は没収され全裸になる。

そして奥に案内されて他の人達と一緒にオリエンテーションを受ける。

全裸の若い男が何十人も裸で一つの部屋に入れられている光景はかなり異様だ。

「諸君、よく国民歓待員に志願をしてくれた、偉大なる指導者は諸君の志願を心から感謝

すると仰っておられた。諸君らの活躍は国の発展と国民の豊かな生活の重要なかぎとなっている。これから諸君は厳しい教育を受け、国民のお客様をおもてなしする技術を身につける。そして上位の役につけば豊かな生活が諸君だけでなく家族にも保証される。国と諸君らの輝かしい未来に期待している」

全員の前の壇上に現れた偉そうな男は抑揚をつけ後ろに飾られた指導者・・・独裁者の肖像画の前で訓示を述べる。

そして俺たちは事務的な連絡や確認を再度行い、それぞれの部屋に案内される。途中で何人かが別の部屋に連れていかれたのを見た。

「お前はこっちだ、着いてこい」

俺たちとは違い、武装した職員に連れて行かれた男の顔は蒼白で、怯えているようだった。「はい・・・」

たぶんあれはＣランクが確定している人なのだろう。

俺たちは見て見ぬふりをして職員の後を歩いていく。

部屋の案内を終えたら遂に俺の体は雌化させられる。

雌化といっても完全に去勢して性転換をする訳ではなく、全身の脱毛処理、豊胸、そして体のゴツさを取るために骨を削ったり、目や唇の整形、声帯の処置をする。

男性器は取らずにそのままにされる。

完全に女性化してしまつては意味がないからだ。

国の運営する性産業には完全な男も完全な女もいる、俺たちはあくまで女の見た目をした男というところに価値があるのだ。引退後は元の男に戻すことも、完全に性転換して女として生活することも自由に選ぶことができるらしい。

「8番、入りなさい」

処置室と書かれた部屋の前で順番を待っていると、中から俺の番号が呼ばれる。

「はい！失礼します！」

俺は返事をして中に入る。

部屋の中には透明なカプセルが並んでいて、中には裸の男が入っている。

寝ているのか、目を閉じて微動だにしない。

その身体上をたくさんのロボットアームが忙しく動いていて、処置を進めている。

「ここに入りなさい、入るとすぐに麻酔がかけられます、目が覚めた時には処置は終わっています」

白衣を着た男性が機械的に説明する。

「はい、よろしくお願いします」

俺は少し怖くなった。

でももう後戻りはできない。

意を決してカプセルに入ると音もなくカプセルが閉まる。

シューという音が聞こえてくると俺の意識は闇の中に落ちた。

「ん・・・」

体がだるい・・・

「8番、終わりました、出なさい」

声が聞こえる・・・でも体が動かない・・・

プシュッと音がして冷たい空気が肌を撫でる。

「ん・・・あ・・・」

動かないと・・・でも体が動かせない・・・

「しかたない、手を貸してあげるから頑張きなさい」

男の手が伸びて俺の体を引く。

「ん、あつ！」

俺は足に力が入らず倒れそうになる。

「まったく・・・車椅子をもってきてくれ」

男が大きな声で指示を出す。

「すみま・・・せん・・・」

俺はなんとか声を絞り出す。

「ああ、大丈夫だ、よくあることだ」

男は慣れた手つきで俺を車椅子に乗せてくれる。

しばらくすると意識がはつきりしてくる。

それに伴って体が軽くなってきた、自分の意思で動かせるようになる。

「すみ・・・すみませんでした、もう大丈夫です」

俺はその場にいる職員に車椅子を返す。

「わかった、もし自分の姿が気になるようだったらトイレに行って確認してきてもいいぞ、

まだ少し時間はある」

職員はトイレの方を目で見ながら告げる。

「はい、そう・・・してみます」

俺は正直変わってしまった自分を見るのが怖かった。

今職員と話している間に聞こえているのも聞き慣れた自分の声ではなかった。

「これが・・・」

トイレに行き鏡に映る裸の女。

これが自分なのかと俺は呆然とした。

髪はまだ短いけど顔や体つきも丸みをおび、おっぱいが着いた姿は正しく女の体だった。ただ一点、股間にある物が男の名残を強烈に主張している点を除けばであるが。

「これが俺の体・・・」

俺は鏡の前で自分の体を触ったり、動いたりしてみた。

間違いないそこに映っているのは自分だった。

「8番、時間だ。集合しなさい」

トイレのドアが開き職員が声をかける。

「は、はい！すみません！すぐ行きます！」

俺は慌ててトイレを出た。

「それではこれから諸君らの教育担当を配置する、担当者から情報管理用のタグがついた首輪が手渡されるからつけるように」

整列した俺たちの前にゾロゾロと男が歩いてくる。

「俺がお前の教育担当だ、よろしく頼むぞ、名前は覚えなくていい、俺の事はご主人様と呼べ」

男はそう言うと言輪を差し出す。

「はい！ご主人様、よろしくお願いします！」

俺はそう言うと言輪を付けやすいように膝について首を差し出す。

「おお、いい心がけだな」

そう言われて横を見ると、他の人はそのまま首輪をつけられたり、受け取って自分でつけたりと様々な着け方をしていた。

「ありがとうございます」

この教育中の成績で進路が変わると聞いたことがある俺はとにかく従順に、優秀な成績をつけてもらえるように振る舞うと決めていた。

もちろん俺にだってプライドもあるし恥もある。

でもそんなものは捨ててでも絶対にAランクになつてみせる。

「お前はなかなか見所があるな、期待してるぞ」

今回は正解を引けたようだ。

俺は決意のこもった目でご主人様を見る。

「はい、立派な国民歓待員になれるように努力します。ご指導よろしくお願いいたします」

指導員の挨拶が終わると一度部屋に戻って待機することになった。

移動中横目に見えたのは、体つきや顔は女になっているけど、胸が豊胸されていない娘たちだった。

「あいつらはCランクが確定してるやつらだ、あいつらには価値がないからお前みたいにちゃんと女にしてもらえないんだ」

ご主人様が俺の視線に気がついて話す。

「そう・・・なんですネ・・・」

俺は何と返せばいいのかわからなかった。

「ああ、だからあいつらは一生あのまま壊れるまで使われるだけだ、まあお前には関係のない世界だ、気にするな」

ご主人様は興味がなさそうに説明してくれた。

Cランク、悲惨な待遇とは聞いていたけど、本当に悲惨だ・・・自ら志願した俺たちは最低でもBランクの真ん中くらいからのスタートが保証されている。

それに成績が良ければいきなりAランク付きにだってなれる。

でもあのCランクは暗くて狭い売春宿で一生過ごすことになるだろう。

俺は背筋に冷たい物が流れるのを感じながら横を通り過ぎて部屋へと向かった。

「それじゃあ少しここで待機してろ、しばらくかかるから座っていてもいいし、横になってもいい、好きにしていっていい」

ご主人様はそう言うのと部屋をあとにする。

「ふう・・・」

俺は疲労感を感じながら部屋に備え付けられた椅子に座る。

この殺風景な部屋が俺がしばらく暮らすことになる部屋だ。

簡易的なベッド、簡易的な机と椅子、そして壁に備え付けられた本棚、それがこの部屋にあるすべてだった。

トイレとシャワーがいつしよにあるユニットバスが入口付近にあるだけだ。入口は外から施錠されていて自由に出ることはできない。

「マニユアルでも確認しておくかな・・・」

俺は何もすることがなく、かといって寝ていたら評価が下がるのではと思い、本棚にある

歓待員基本テキストを開いて読むことにした。

中には待機中の姿勢や言葉遣い、日頃の心得的な物が細かく記されている。ガチャッと入口の鍵が開く音がする。

俺は急いで本を閉じると書いてあった姿勢を意識し扉が開くのを待つ。

「待たせたな・・・なんだ、もうテキストを読んでいたのか、まあまだ不十分だけど、初日にしては合格だ」

俺は背筋を伸ばし、両手をお腹の前で合わせてご主人様の入室を待っていた。

「ありがとうございます」

やつぱりまだまだ形だけしかできてなかったようだ。

「まあ何事も心構えが肝心だ、お前は優秀だな」

ご主人様からお褒めをちょうだいする。

「ありがとうございます、早く一人前になれるように精進いたします」

俺はお礼をすると頭を下げる。

「それじゃあ始めるぞ、と言っても今日は説明だけだ、疲れてるだろうからな、本格的な教育は明日からだ」

それから俺は施設でのルールや今後の守るべき事項の説明を受ける。

「あ、あの・・・すみません・・・」

俺は思わず問いかけた。

「ん？どうした？」

ご主人様は手を止める。

「あの・・・メモをとることはできますか？」

俺は淡々と進む説明に覚え切れるか不安になって確認してしまった。

「ああ、メモな、ダメだ。全て頭に入れろ、体で覚えるんだ」

ご主人様から返ってきたのは驚きの答えだった。

「は、はい、申し訳ありませんでした」

俺は少し怯んでしまった。

「まあ全てテキストに書いてあることだし、文字で覚えてもしかたがないからな、後で勝手に書いてまとめる分には好きにすればいい」

「かしこまりました、お答えいただきありがとうございます」

「それじゃあつづけるぞ・・・以上が最低限覚えることだ、わかったな？」

最低限・・・正直、覚えきれない。

俺は少し弱気になってしまった。

それほどに最低限の内容が多かったのだ。

起床時間から起床後の動き、日中の予定など、全てに細かい指示があった。何回もテキストを見て復習しなければ絶対にミスがでる。

「あと言葉遣いについてだが、自分で考え得る限り全力で女のように喋るんだ。もし男のような言葉遣いをするとう首輪についてる機械が感知して電気を流すからな、結構痛いから気をつけろよ」

これ以降俺・・・私は心の中で考える時も一人称を私とすることにした。

日頃からきをつけていないと言葉遣いというのは必ずクセがでてしまう。私は心も女として生きていくため、とにかく気をつけることにした。

今までの人生を全て捨てる・・・それが今の私に求められているのだと理解した。

夕飯の時間になった。この時間は食堂のような場所で全員で食事をとる。

そしてここでは私語が許されている。

席は番号順なので、自由にはいかないけど、私はここにきて初めて同じ道を選んだ人と

話をした。

「ねえねえ、あなたはなんでここにきたの？」

隣に座る57番が声をかけてくる。

「え？それは・・・国に・・・」

私は戸惑いながら模範解答と思われるものを考える。

「うわ、まじめじゃん、そういうのいいって」

少し引いた様子で57番は私の答えを遮る。

「あれでしょ？Aランク、目指してるんでしょ？まあそうだよ、富も名声も手に入られて、将来も安泰、国民歓待員の男じゃせいぜい国の平均年収くらいだし、その後のキャリアの選択肢もいまいちだもんね」

彼女の言ってることは当たっていた。

国民歓待員の3部門、男部門・女部門・トランス部門、これは待遇に明らかな違いがある。いちばん低いのが男部門で、支給される給料も良くて国の平均年収くらいだし、アフターキャリアのサポートも、せいぜいご相談にのります程度だ。

対してトランス部門は高待遇でアフターキャリアのサポートも手厚い。

コネか金がないと確な仕事につけないこの国ではとても魅力的な仕事なのだ。

「ま、まあそれは・・・」

私は答えに詰まる。

「まあ私たちみたいな庶民は、この道以外軍隊とかしか働き口ないもんね、エンタメ業務は待遇もいけどコネがなきゃ入ることなんてできないしね」

57番が言ってる事は完全に当たっている。

「じゃああなたは？」

私は話の先を変える。

「私？私はまあ楽にいい金がかせげればいいかなって思ってるよ、だからAランクとかは別に希望してないの」

いろいろな人がいるんだなと思った。

私は絶対Aランクになりたい。

そうすれば親も楽ができるし、弟や妹も望む職につけるかもしれない。

その為に私はプライドを捨てることにしたんだ。

「まあがんばってね、別にAを目指すのをバカにするつもりもないし、邪魔をするつもりもないから。もし本当にAになれば私を付き人にでもしてね！」

57番は軽く言って残った食事を食べ始める。

私も黙って残った物を食べた。

その後も57番は色んな人に声をかけて交流をしていた。

私もつられて会話の中に入ってみんなの考えが色々あることを知った。

部屋に戻って今日の復習をすると私はベッドに入って眠りについた。

今日は疲れた・・・明日から本格的に教育が始まる。

だから早く寝て明日に備えよう。